

# 天文台発 ぽらりす

《2024年10月3日発行/毎月初めに天文台職員が情報発信します》



## 【彗星を見よう】

皆さんは、彗星(すいせい)を見たことはありますか？ 夜空の中に突如と現れ、長い尾を引く奇妙な姿から昔の人々は不吉な事の前兆として恐れていたようです。彗星は年間に数十個は発見されており、その多くは写真で撮影するか、望遠鏡を使わないと確認することができませんが、稀に肉眼でも見える明るい彗星が現れます。

昨年1月～2月にかけて発見された「紫金山(ツーチンシャン)・アトラス彗星」が9月末に太陽に最も近づき、その後地球に接近するため、10月中旬には肉眼で見える明るい彗星になるかもしれないのです。今年の春にはそれまで順調に明るくなっていた彗星の増光が鈍くなったことで、すでに崩壊し始めているとの情報もあり多くの天文ファンを悲観させましたが、その後、再び増光を始めデータ分析でも崩壊の兆候はないことが分かりました。彗星の光度予想は難しいものの、今月中旬以降には日没後の西の低空に、肉眼で見える可能性があります。

### ★ 「紫金山・アトラス彗星」を見つけよう

郊外の空が暗い場所では、彗星から伸びる尾も肉眼で見えるかもしれませんが。札幌市近郊では西側が海で水平線まで見通せる石狩～浜益などの海岸線がお勧めです。彗星は時間とともに高さがどんどん低くなるので、明るいうちから準備し、薄明中にいかに早く彗星を見つけるかが重要です。そのために、観測日時における彗星の方向と高さを事前に調べて位置の見当をつけます。また、双眼鏡があると薄明の中でも見つけやすくなりますので、是非ご用意されることをお勧めします。街明かりのある都市部でも双眼鏡や望遠鏡を使えばボンヤリとした彗星本体を見つけることができるでしょう。

### ★ 「紫金山・アトラス彗星」を撮影してみよう

スマホやデジカメを持っている方は、彗星の撮影にも挑戦してみましょう。長い尾が伸びた彗星を写し撮ることができます。スマホでは、夜景モードに設定し撮影してみましょう。デジカメでは、ISO感度を高めに設定し、露出時間を10秒程度で撮影してみましょう。いずれも三脚を使う事をお勧めします。

また、事前に夕焼けの空や夜景などで練習をしてみると良いでしょう。



彗星の形から流れ星と同じように考えられている方もおられます。流れ星は、地球大気中の現象で、動きも速く一瞬で消えてしまいます。彗星は太陽系の果てからやってきて、太陽や地球に接近した数日から数十日の期間、毎日少しずつ星々の間を移動して見えます。彗星は、私たちが生きている間は二度と見るできないものが殆どで、これが他の天体と異なる彗星のおもしろさでもあります。まだ彗星をご覧になったことがない方は、是非この機会に見てみましょう。詳細な彗星の位置、明るさなどの情報や詳しい写真の撮り方などを知りたい方は、天文台職員にお尋ねください。

(林 美輝)

## 【今月の天文現象ピックアップ】

今月は紫金山・アトラス彗星以外にも、注目したい天文現象があります。

### ○8日：「10月りゅう座流星群」\*<sup>1</sup>が極大(22時)

流星物質をまき散らした母天体は公転周期約6.5年の「ジャコビニ・チンナー彗星」\*<sup>2</sup>と考えられており、以前は「ジャコビニ流星群」と呼ばれることもありました。1933年や1946年には1時間あたり数千個もの流星を降らせたことから、1972年には日本で「大出現する」と大騒ぎしたものの空振りでした。ただ、彗星の公転周期の2倍にあたる約13年ごとに大出現する傾向があり、1985年、1998年、2011年とかなり活発な活動があったので2024年は要注意です。\*<sup>3</sup>

今年は月明かりの影響も少なく、空が暗くなる頃から夜半前までが観察に適した時間です。放射点はりゅうの頭の所のγ(ガンマ)星付近(こと座のベガの北寄り)で北西の空にあります。流星は空のどの方向にも出現します。流れる速度が比較的遅いのが特徴のこの流星群、はたして平時の「1時間当たり3個」よりも増えるでしょうか？



りゅう座の位置(22時)

- \*1 2009年、流星群の名称は母天体ではなく、放射点のある星座名で呼ぶことになりました。
- \*2 21P/Giacobini-Zinner。ジャコビニ・ジンナー、ジャコビニ・ツィナー、ジャコビニ・ツィンナー、と表記されることもありますが、前者はフランス、後者はドイツの天文学者です。
- \*3 彗星の次の近日点通過(太陽最接近)は2025年3月末なので、来年も要注意。また、2018年にも1時間あたり数10個~100個の流星が北欧などで見られたので、油断できません。

### ○15日：十三夜「後の月(のちのつき)」

旧暦8月15日(今年は9月17日でした)の十五夜の月見に加え、日本では旧暦9月13日(十三夜)にも月見を楽しんでいたそうです(平安時代の醍醐天皇が始まりという説があります)。そして、どちらか一方の月しか見ないことを「片見月(かたみつき)」または「片月見(かたつきみ)」と呼び、災いが来ると忌み嫌ったそうですが、現代の皆さんは縁起を担ぎますか？まん丸よりも少し左側が欠けた月を眺めて古人(いにしえびと)の想いに近づくのも趣がありますね。

### ○17日：満月(2024年で地球に最も近い満月、いわゆる「スーパームーン」)

肉眼で満月の大きさの違いを実感できるでしょうか？ 翌18日からの夜間公開でも月を望遠鏡で観望できます(まん丸ではありませんが)。

### ★昼間の公開で太陽の観望を希望する方へ

太陽の活動自体は活発で、天文台の望遠鏡で黒点やプロミネンスを直接観察することができます。しかし、秋分を過ぎてどんどん昼が短くなって太陽高度も低くなり、午後の公開(14時~)では公園の木に隠れてしまうようになりました。太陽高度が高くなる春分(来年3月下旬)までの間、太陽の観望を希望する方は、**午前中**にお越しください。(布施 隆久)

☆10月の夜間公開(予約は不要です。公開時間内にお越しください。)

4(金)~6(日) 19~21時 土星・夏から秋の星座

18(金)~20(日) 19~21時 月・土星・夏から秋の星座

※休台日は、7日(月)、15日(火)、21日(月)、28日(月)です。